

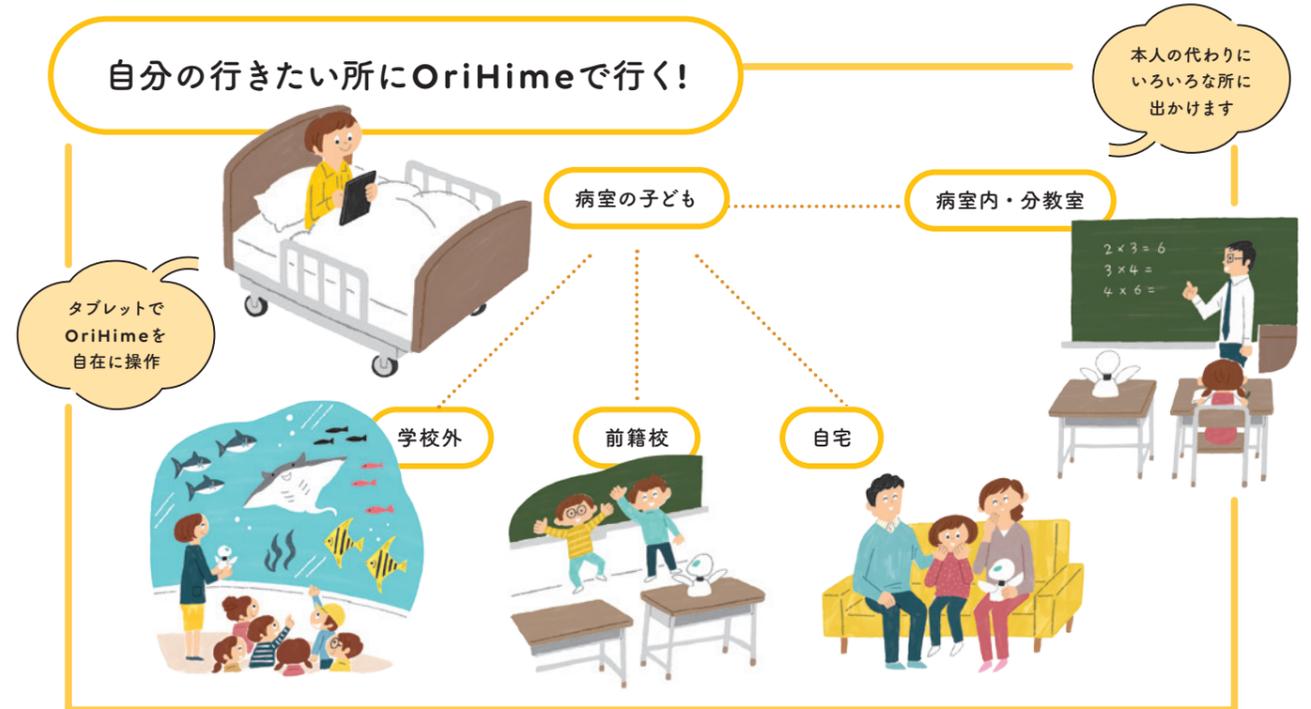
「院内学級プロジェクト」 検証事業の成果報告

2016年度から5年間実施してきた院内学級プロジェクト。病気療養中の子どもの学習に、分身ロボット「OriHime」を活用した成果が認められ東京都の特別支援学校（病弱部門）で予算化されました。ご協力いただいた先生方にお話をうかがいます。



OriHimeのしくみ

OriHimeを行きたいところに持って行き、インターネットを通じて病室のベッドサイドなどからタブレットで遠隔操作します。視界の広いカメラで周囲を自由に見渡したり、声やジェスチャーを伝えたりして、離れていてもコミュニケーションがとれます。



voice

病弱教育の新たな希望となる学習モデルの先駆けとして

都内にある大学附属病院や専門病院には、学齢期の子どもたちも多数入院しています。治療を優先するために地域の学校を離れていますが、どの子ども「もっと学びたい!」「友達と関わりたい!」「外の社会を知りたい!」という気持ちを抱えています。こうした意欲に応えるため、ベネッセこども基金やオリィ研究所の社会貢献としての協力を得て、病院訪問学級の教育を担う都立特別支援学校4校（のち5校）で「院内学級の子どもたちの学び支援プロジェクト」に2016年から参画し、分身ロボットOriHimeを活用して、入院中の制約を乗り越え、希望をかなえる学習を実現してきました。

治療中でベッドを離れることができない児童や生徒に代わり、分身ロボットが入学式や卒業式の会場に「出席」して証書を受け取ることも可能となりました。また、退

院後に戻る学校と交流授業を行ったり、入院中の児童や生徒同士を結んでの合同学習や遠隔社会見学を行ったりと、新たな授業の形を創り出すことができました。

この実績により、今年度から東京都教育委員会により都立病弱別支援学校全5校に分身型ロボットOriHimeが配備されることとなりました。今後はさらに実践が広がっていくでしょう。

都立光明学園は、「本校」「分教室」「訪問教室」と、病気治療中の子どもたちにさまざまな形で授業を行っています。今後も分身ロボットを活用しながら学びを広げていきます。

東京都立光明学園
田村康二朗 統括校長



院内学級プロジェクト参画校

都立北
特別支援学校

(東京大学医学部附属
病院内こども分教室)

都立小平
特別支援学校

(国立精神・神経医療研究
センター病院内分教室)

都立光明学園

(国立成育医療
研究センター内
そよ風分教室など)

都立墨東
特別支援学校

(国立がんセンター中央
病院内いるか分教室など)

都立武蔵台学園

(府中分教室)

CLOSE UP OriHimeの活用で子どもたちの世界が広がった授業事例

OriHimeを活用した授業を現場で数多く行っている久保田先生に、印象深いエピソードをご紹介します。

前籍校とのつながりを持ち続け、理解を深め合えた!

episode 01

長期欠席中の不安感をやわらげてくれた OriHime。

院内学級に転籍していた小学4年生の児童。前籍校の教室にOriHimeを置き、入院中の病室から授業や帰りの会に参加しました。動きを伝えることのできるOriHimeで、クラスメイトと毎日バーチャルハイタッチであいさつすることを思いついたのは前籍校の担任の先生。クラスメイトとの交流を持ち続け、復学後の居場所づくりにつながりました。

※前籍校：児童生徒が通っていた学校のこと。
病院内教育を受けるには、転籍(転校等)が必要になる。

episode 02

OriHimeを通じて自然とクラスに広まった思いやりの心。

小学5年生の児童は、病室からOriHimeで前籍校の授業に参加。グループワークの内容に合わせて、音声や文字など最適な形を選びながら活動。通信のタイムラグはクラスメイトが配慮してカバーするなど、みんなが授業に参加しやすいように思いやる気持ちが自然と芽生えました。運動会などの行事でも、入院中で参加できない児童のために衣装を作るなど、互いに絆を深めることができました。

知的好奇心や社会とのつながりを大切にできた!

episode 03

子どもの興味をきっかけに、OriHimeで校外学習へ。

ある子どもから算数クイズを出されたことをきっかけに実現したバーチャル課外学習。OriHimeを持って教員が東京理科大学内の数学体験館に向き、館内のアクティビティに子どもたちが病室から参加。小学生～高校生までの子どもたちが夢中になって楽しむ姿に、外の世界とつながる喜びや、子どものもつ知的好奇心の強さが表れていました。



voice

同年代の子どもとの交流が、心の成長に

院内学級では、同時期に同年代の子どもがいないこともあります。OriHimeがあれば前籍校のクラスメイトやほかの病院内の子どもと交流をもつことができ、心の成長に寄与できていると感じています。もちろんそれぞれ性格や状況にちがいががあるので、OriHimeの使い方や頻度などは子どもをよく見て、前籍校の教員などと

もよくコミュニケーションをとって検討することが大切です。

東京都立墨東特別支援学校
病弱教育部門
つばさ病院訪問学級
久保田智子先生



interview

本事業をきっかけに東京都でも分身ロボット導入へ

私は16歳のとき結核で隔離病棟に入院しており、身体的制限から学校に行けず友達にも会えない孤独を経験しました。その経験をもとに2012年に「孤独の解消」を目的にCEOの吉藤とCTOの椎葉とともにオリイ研究所を設立し今に至ります。本事業の構想を皆様と議論したときには、めざしている未来が一步近づいたように感じ、感動したのを覚えています。

OriHimeの説明のために何度も教室に通ったり、インターネット回線のない病棟の中で活用する方法を先生方と一緒に考えたりしながら、プロジェクトは一步一步進

んできました。その結果、日常の授業だけでなくOriHimeで社会科見学に行ったり、文化体験をしたりと多様な方法で子どもたちに活用されるようになりました。

そしてついに、ベネッセこども基金の皆様のご尽力、先生方や子どもたちの応援を得て、分身ロボットによる遠隔教育が都主導で公教育に導入されました。東京都以外の活用も進むなど、本事業の影響は全国まで波及していると感じています。ベネッセこども基金の皆様、そして学校関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

株式会社オリイ研究所
共同創設者 兼
取締役 COO 結城明姫



interview

教員とともに子どもの成長を促せる存在に

OriHime導入当初は学校にも病院にも今のよう通信環境がなく、それを整えることからスタートしました。資金面や病院側の理解など簡単な道のりではありませんでしたが、ずっと病室で過ごしている子どもたちの世界が広がる希望になると信じて進めてきました。院内学級での学びの幅が広がったことも成果ですが、自宅にOriHimeを置いて家族と団らんしたり、OriHime

の操作を通して発達が促されたりと、当初の想定外でも子どもたちの心のハードルを下げてくれる事例がたくさん見られました。分身ロボットならではのちょうどよい存在感がコミュニケーションをスムーズにしてくれるようです。大きな可能性を秘めているこのOriHimeを、現場の教員がもっと気軽に使えるようになり、活用事例をどんどんストックしていけたら良いと思います。

東京都立小平
特別支援学校
武蔵分教室 主幹教諭
田添敦孝 先生



これからの取り組み:

GIGAスクール×ICTでの学び支援

医療の進歩で救命率が上がった一方で、長期入院中の子どもの学習空白問題が浮き彫りになりました。特に高校生世代は、教育を受ける権利が十分に保障されていないのが現状です。ベネッセこども基金では今後もNPO・学校・行政・企業などと連携し、病気療養中の子どもたちがICTを活用して学校や地域の支援団体とつながることで学習空白や将来への不安を解消することをめざしていきます。

➡ ICTやロボットを活用した主体的な学び

➡ 高校生の学習保障

